

論文審査の要旨及び担当者

No. 1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	山野 大星
論文審査担当者	主 査	政策・メディア研究科委員	兼総合政策学部教授 井庭 崇	
	副 査	政策・メディア研究科委員	兼政策・メディア研究科教授 小林 博人	
		政策・メディア研究科委員	兼環境情報学部教授 石川 初	
		東京大学 大学院公共政策学連携研究部教授	鈴木 寛	
学力確認担当者：				
山野大星君の学位請求論文は「専門職教育におけるパターン・ランゲージによる学びの支援：建築教育カリキュラムでの実践」と題し、全9章から構成されている。 学位請求論文では、系統的な専門職教育において、学習者の学びの支援をするためのパターン・ランゲージを作成し、実際に専門学校で活用することで、その有効性を示している。本研究では、専門学校における建築専門職教育において、学習者が経験的に学びを深め、実践的なスキルを系統的に習得できるようになる新しい学びの支援方法として、「学ぶ内容」（設計）と「学び方」（実践）の二種類のパターン・ランゲージを作成した。 第一の「学ぶ内容」のパターン・ランゲージは、設計課題のテーマに関連して「バイオクライマティックデザインによる住宅設計パターン」であり、これをもとに設計作品の評価のためのルーブリックも開発した。そして、専門学校において研究授業を実施し、パターン・ランゲージを利用する方が、利用しない従来の指導方法よりも効果的であることが実証された。また、この方法を活用することで、オンライン授業でも、対面授業に近い学習効果を生み出す可能性が示された。 第二の「学び方」のパターン・ランゲージは、「建築を学ぶためのパターン」である。そして、これを用いたワークショップを入学時に実施し、新たな学びへの参加と習得への不安を軽減することが明らかになった。また、2年次進級時の学生に対して、学びと進路をテーマとしたワークショップ実施し、学習者が科目間の関連性を理解し、参加、習得、進路という学びの段階性を認識するための有効な方法であることが確認された。さらに、自己の学びや将来のキャリアに対する省察を促す効果も示された。 山野君は、建築設計の実務を経て、専門学校の教員を約25年務めており、現在は校長を務めている。本研究は、山野君が10年以上継続する勤務校での教員との協働によるカリキュラム開発を行った教育デザイン研究の最近の成果である。パターン・ランゲージによる建築専門職教育カリキュラム・デザインにおける学びの支援の効果検証を行うため、勤務校及び他専門学校の建築系学生を対象とした研究授業やワークショップによる実験研究を実施し定量的研究を行なった。 論文の構成は以下のとおりである。 第1章では、本研究に取り組む上での問題の所在、研究の目的・意義と対象・方法を明らかにし、研究の枠組みと研究の構成について述べている。				

第2章では、先行研究をふまえ、専門学校等における専門職教育カリキュラムの検討を行い、専門職教育の問題を検討し、その問題の解決を支援するためのパターン・ランゲージによる方法論について述べている。さらに、本研究が着目するパターン・ランゲージについての先行研究を整理し、本研究で作成した二種類の、「学ぶ内容」のパターン・ランゲージと「学び方」のパターン・ランゲージによる学びの支援について述べている。

第3章では、専門職教育の二つの問題の解決へ向けての支援をするためのパターン・ランゲージによるカリキュラム・デザインの実践について述べている。そして、教員によるパターン・ランゲージの作成の概要、作成方法、パターン・ランゲージ作成による教員の省察について述べ、本研究で作成した二種類のパターン・ランゲージの内容について整理をしている。

第4章では、原著論文「住宅設計課題におけるパターン・ランゲージを用いた評価作成と指導の効果」（日本教育工学会論文誌，2022年，第46巻第3号，pp.493-507）の内容をまとめなおし、実験研究1：「学ぶ内容」のパターン・ランゲージによるパフォーマンス課題の設計として、住宅設計課題における評価作成と指導の効果を検証している。

第5章では、原著論文「パターン・ランゲージを用いた専門学校におけるオンライン建築設計実習の実践と効果の検証」（日本教育工学会論文誌，2024年，第48巻第3号，pp.509-522）の内容をまとめなおし、実験研究2：「学ぶ内容」のパターンによるパフォーマンス課題の設計として、オンライン建築設計実習の実践とその効果を対面授業と比較・検証している。

第6章では、原著論文「パターン・ランゲージを用いた専門学校における建築系新入生ワークショップの効果」（ヒューマンインタフェース学会論文誌，2023年，第25巻第2号，pp.99-114）の内容をまとめなおし、実験研究3：「学び方」のパターン・ランゲージによるカリキュラム全体の関連づけとして、「学び方」のパターン・ランゲージを用いた建築系新入生ワークショップの効果を検証している。

第7章では、原著論文「建築系専門学校生の学びと進路のワークショップにおけるパターン・ランゲージによる教育的コミュニケーション支援」（ヒューマンインタフェース学会論文誌，2024年，第26巻第1号，pp.101-116）の内容をまとめなおし、実験研究4：「学び方」のパターン・ランゲージによるカリキュラム全体の関連づけとして、「学び方」のパターン・ランゲージを活用した4年制学科は「学び」、2年制学科は「進路」についての、ワークショップを実施し、その効果を検証している。

第8章では、パターン・ランゲージによる学びの支援の総合考察をおこなっている。また、パターン・ランゲージによるカリキュラム・デザインと他分野との関係の考察をくわえ、さらに、パターン・ランゲージによるカリキュラム・デザインのデザイン原則をまとめている。

最終章である第9章では、本研究の結論として各章のまとめをおこない、本研究が提案したカリキュラム・デザインの方法論の他パフォーマンス課題、建築教育以外の専門職教育への展開等の可能性を述べている。最後に、本研究の課題について述べている。

本研究の提案は、専門学校において広く見受けられる、資格取得に特化した「知識習

論文審査の要旨及び担当者

No. 3

得的な教育」と、学生の自主性を重視した「放任的な教育」という二極の間を埋めるものと位置づけることができる。そして、その専門職教育に特化したパターン・ランゲージを作成し活用することで、系統主義教育と経験主義教育の長所を組み合わせた専門職教育カリキュラムをつくることができる可能性が示された。

本研究は、今後の専門学校等における専門職教育カリキュラム・デザインの実践例を提示するものとして、また統一的な基準・モデルのない専門学校等における今後のカリキュラム開発におけるひとつの方法論を提示するものとして、高等教育段階の専門職教育において意義があると考ええる。また、パターン・ランゲージが教育の現場で効果検証された事例が少ない中で、その効果を実証することも意義としてあげられる。

本論文にまとめられた実証的な学術的成果は、山野君自身の勤務校での教育実践から生まれてきたものであり、今後も山野君の教育実践とともに方法論が磨き上げられ続けていくことは疑う余地が無い。以上、本研究によって示されたパターン・ランゲージによる教育効果の成果は該当分野における新規性が高く、また理論的側面と実践的側面を高度にあわせもつものである。専門職教育の現場をはじめとして、他分野への応用も大きく期待できる。

本研究は、山野大星君の高度な研究遂行能力と当該分野における豊かな学識を有することを示すものであり、その成果は専門学校教育、専門職教育の変革に確かな一歩として位置づけられることは疑う余地がない。以上から、審査委員一同は、本論文が当該分野の研究に寄与する十分な成果をあげたものと判断し、山野大星君が博士（政策・メディア）の学位を授与するに値すると認めた。